

かそんなことが言はれようか。」彼は尙ほ他の所で「吾人を生命の内面に導くものは直覺である。」と述べてゐる。彼が意味する直覺は硬ばつた思想の型を融合せしめて私達を純一な境地に導くものである、彼の他の言葉で言ふたならば普遍的生命との感應である、尙ほ言葉を換へて言ふならば、全人格を以ての体験である、此体験によつてのみあるべき世界とあるところの世界とを連鎖せしめる、そして最も普遍妥當的な人性の働を可能とする、私はこれの具体化を印度降誕の救世主に於てみる、ナザレの聖人イエス、クリストに於て見れば宗教的体験に依つてのみ、人性の矛盾と分裂とは融合し得られ、神人の交通は可能となる、そして眞の無垢な自己の姿が現はれて来る、これあらゆる思惟の超越した秘義である、無限に汲めども枯れざる神秘の泉である。(十、二、十三)

蓮華色の出家を讀みて

太田 純志

創作と批評とは對象の異である換言すれば批評とは創作そのもの、或對象の價値を改造すると云ふ欲求から出た心理的作用である斯なると非常に難い問題になるから單に明かに知らんとする意味で論究して見やふ佛陀の宗教はその人格に淵源したその信仰證悟を生命として居る故にそが悟得の法を知らんと欲せば恰も光線の用を以て太陽の體を知るが如く教法の内容を發端として教法を活かし感化の中心となりし人格に溯らねばならぬ當時の教團に於ては朝に清涼の法味に酔ふ聖者が前夜には狂惑の奴隸であり涙に夜毎の枕を濕した哀れな女性が輝く日には靜寂な姿に目覺めたのであつただから吾々の云ふ煩惱即菩提や生死即涅槃や善惡不二は只に高座上の理論のみではない常住論から云ふ人間の靈と肉とが一つのものであるとする、の靈によつて肉が榮化せられ罪業が淨化せらるゝの

である後の根本佛教の人達も此の解結に苦悶した悲劇の主人公であつた丁度加持力教の修道院の尼僧が夜更で唯獨り禮拜堂に入つて主に祈りを捧ぐる時その薄闇の堂内に瞬く蠟燭の灯の灰明りに照された基督の塑像を拜して思はずも夫れに抱きつきハツと我に反つて泣く事があると云ふ吾々は他人の罪業を傍觀して居る時は如何に惑亂しても餘裕があるがそれが自己の實際となつた時に眞の罪業に觸れる罪の人でなくては眞の宗教家ではない吾々は彼の教團の人々等の具體的生活を心理的に描寫するには矢張り創作の境地に入つて藝術品に再現するより道が無い、元來佛陀は世相の實狀として女性に一般並に特別の惡德を見これを叱責し呵拆せざるのみか反つてその特性に依り捨惡就善の勸誡を盡したのであつた勿論華色比丘尼も其の一人である。

合掌には華色比丘尼の生前譚や出家の動機目連尊者誘惑說佛道修證等を可成明細に記されてある彼は南天竺得叉尸羅の生れにて後には波羅捺に住し

た其の間には恐しい戀の葛藤や倫落の生活が間斷なくあつた出家してからは蓮華色比丘尼又は華色比丘尼又ハ溫盆羅薊尼、鬱波羅比丘尼とも云ふた宗祖聖人は之に對して單に達多惡逆の對象人物としてのみ數箇所^ニに仰せられてある開目抄「華色比丘尼ハ提婆ニガイセラレ」十二、三七法華題目抄「阿羅漢折殺華色比丘尼」十、七立世安國論「提婆達多之殺^セ蓮華色比丘尼」七、二四文

摩訶摩耶經下云「時提婆達多見阿闍世王不許前已心大苦惱舉手拍頭切齒罵罵時鬱波羅比丘尼從王宮出而於門外見提婆達多即呵之言汝令釋種不得熾盛於佛法中作大留礙時提婆達多聞此語已極大忿恚即以手拳而打其頭彼比丘尼尋便命終提婆達多又害羅漢比丘尼」文阿闍世王佛陀に歸依する様になり提婆の宮庭に入るを禁じたり時に偶々蓮華色の居合せて哥したる爲めなり。

經律異相^{二十}「佛者闍崛山ニ在シ時蓮華媛女自ラ善心ヲ生シ比丘尼トナリ佛ニ到ル途ニ流泉ニ飲シソノ面像妍麗無比ナルヲ見テ形ヲ毀ツノ未早ク私情

ヲ快クシテ後出家スルモ遅カラジト爲シテ還リ家ニ向フ佛ソノ道果ヲ得ベキヲ鑒知シ一ノ容姿絶世ノ女人ヲ化作シ共ニ城ニ復ル化人途ニ蓮華ノ膝ヲ枕ニシテ睡臥ス忽焉トシテ命終シ臙脂臭爛シ腹潰工蟲出テ遂ニ肌體解散ス蓮華見テ驚怖シ佛所ニ到リ自ラ之ヲ白ス佛爲ニ法ヲ説キ阿羅漢ヲ得セシム」文合掌所引の法句經註には出家後半月にて四眞諦を證し或る夜布蔭堂に入り燈火を見てそれを緣境として火遍處を修し阿羅漢果を證せりと

西域記卷四「佛初利天ヨリ下降シ玉フ時蓮華色比丘尼化シテ轉輪王トナリ七寶導縱シ四兵警衛シ佛所ニ至リテ比丘尼ニ復シ初メテ世尊ヲ見タルヲ悦フ佛告テ曰ク汝ハ初見ニ非ズ須菩提既ニ慧眠ヲ以テ我ヲ見ルト」文佛陀の双神變は外道降伏の爲であつた。

大智度論一四十三「華色比丘尼呵之復以拳打尼尼即時眼出而死」(文明三逆罪下)

谷響統四初「經律異相ノ蓮華色尼發心得道ノ緣等

ヲ出セル事アリ提婆所殺ノ蓮華色ト同異未詳又佛初利天ヨリ降リ玉フ時輪王ト化シテ最前ニ佛ヲ拌セシ華色比丘尼モコレト同異測リカタン經律異相ニハ又別に華蓮姪女ノ事ヲ出セリ」云云外に記八本五三輔正記八二十涅槃會疏三十一等ニ出ヅ

美しい名の蓮華比丘尼は恐ろしい達多の爲に悲慘の死を遂げた考へると當時の教團の人々と吾等の間には切つても切れぬ人間性の結ばれて居る事が悟られる女性の世界を男子のそのの如くに展開せんとするときは優秀なる創造力に俟たねばならぬ若し此等婦人の事蹟を明かにするを得ば佛教史上婦人の如何に活動せしかを知るを得るものなるを以て之を記して後鑒を待つのみ成りしものは皆滅す不逸放に勤修せよ。

聖き涙

秦觀行

諸法實相鈔曰く現在の大難を思ひつゝくるにも涙、未來の成佛を思ふて喜ぶにも涙せきあえず、